

王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅶ～

2013

例 言

- 1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。調査地は以下の通りである。
 - ・カナヅカ古墳 奈良県高市郡明日香村大字平田小字カナヅカ93-1ほか
 - ・真弓ミヅツ古墳 奈良県高市郡明日香村大字真弓小字ミヅツ133-1ほか
- 2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)
相原嘉之、猪熊兼勝、上田俊和、奥田 尚、河上邦彦、米田隆夫、杉本義三、辰巳月美、辰巳弘夫、中島成和、長谷川 透、前田喜代次、米田文孝
- 3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と奈良国立文化財研究所発行の「地の窪」「真弓」(1:1000)、明日香村都市計画図(1:2500)を使用した。
- 4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたり、文責は各文末に示した。
- 5、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 6、本書の編集は西光慎治が担当し、辰巳俊輔が補佐した。

目 次

例 言 目 次	(32)
第1章 調査に至る経緯と目的	西光慎治 (33)
第2章 飛鳥地域の測量調査	(34)
第1節 地理的・歴史的環境	西光慎治 (34)
第2節 カナヅカ古墳測量調査報告	辰巳俊輔・西光慎治 (39)
1、はじめに	(39)
2、研究史	(39)
3、測量調査報告	(43)
第3節 真弓ミヅツ古墳踏査報告	辰巳俊輔 (46)
1、はじめに	(46)
2、踏査報告	(46)
3、表採遺物	(46)
第3章 総括	西光慎治 (48)

挿図目次

第1図：明日香村周辺地質図	第7図：大和國高市郡平田村地引切圖
第2図：飛鳥地域周辺遺跡分布図(1:25000)	第8図：奈良県高市郡明日香村地籍図
第3図：打墨縄(1848)	第9図：カナヅカ古墳墳丘測量図
第4図：聖蹟図志(1854)	第10図：カナヅカ古墳地形測量図(1:1000)
第5図：古物發掘第26號(1890)	第11図：真弓ミヅツ古墳位置図(1:1000)
第6図：カナヅカ古墳周辺地形図	第12図：真弓ミヅツ古墳周辺地籍図(1:1000)

第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいままでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成20年5月～平成25年1月にかけてのべ13日間行った。

（西光慎治）

【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	カナヅカ古墳	真弓ミヅツ古墳
担当者	西光慎治	西光慎治
調査員	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、秋殿古墳、岩屋山古墳、打上古墳、エンドウ山1号墳、鬼の俎・雪隠古墳、戒成組田古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、キトラ古墳、艸墓古墳、牽牛子塚古墳、庚申塚古墳、越塚古墳、越塚御門古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、高松塚古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、出口山古墳、寺崎白壁塚古墳、堂ノ前塚古墳、中尾山古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、舞谷2号墳、松山呑谷古墳、真弓籬子塚古墳、真弓テラノマエ古墳、マルコ山古墳、都塚古墳、ムネサカ1号墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳、与楽籬子塚古墳

第2章 飛鳥地域の測量調査

第1節 地理的・歴史的環境

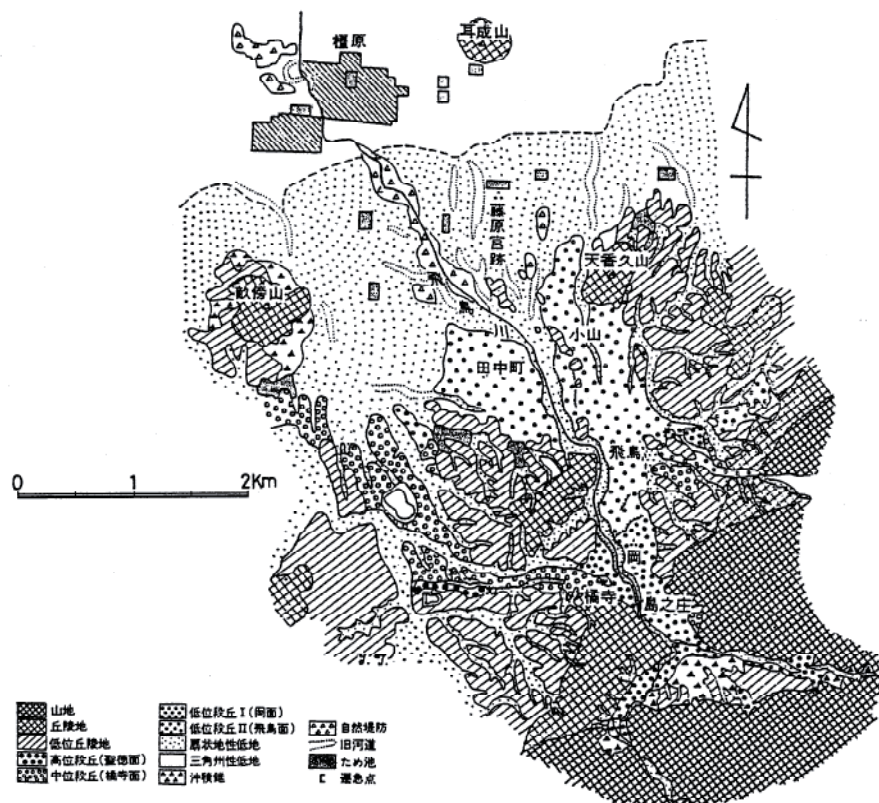
【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曾我川に流れ込んでいる。

（西光慎治）



第1図 明日香村周辺地質図

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

飛鳥地域は飛鳥川と高取川を中心に肥沃な段丘面が形成され、ここを機軸として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。まず、高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した桧前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・鳥庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。弥生時代になると飛鳥川流域の飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）や山田道遺跡（中期）があり、鳥庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アリエ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。そして、飛鳥時代前夜となる古墳時代がはじまる。

〈古墳時代〉

飛鳥地域の古墳時代については現段階ではまとまった遺跡は確認されていない。そういった中であって、坂田寺下層遺跡や鳥庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、飛鳥水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橋遺跡や川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡等でも竪穴住居や韓式系土器、初期須恵器、滑石製玉類や土坑などが検出されている。高取川流域では御園アリエ遺跡や桧前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。更に飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約60mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曾我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓罐子塚古墳がある。真弓罐子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊飯具や釵子出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接している観音寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。



1. 岩屋山古墳 2. 真弓ミツツ古墳 3. 小谷古墳 4. 益田岩船 5. 沼山古墳 6. 牽牛子塚古墳 7. 越塚御門古墳 8. 真弓鐘子塚古墳 9. 与楽古墳群
10. スズミ1号墳 11. スズミ2号墳 12. カツマヤマ古墳 13. マルコ山古墳 14. 真弓テラノマエ古墳 15. 佐田遺跡群 16. 末明神古墳
17. 佐田2号墳 18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳 22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山香谷古墳
25. 清水谷遺跡 26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 稲村山古墳 29. 観音寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 呉原寺跡
33. 検前門遺跡 34. 検前遺跡群 35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 検前上山遺跡 38. 御園チシヤイ遺跡・御園アリエ遺跡 39. 塚穴古墳
40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 中尾山古墳 43. 平田キタガワ遺跡 44. 梅山古墳 45. カナツカ古墳 46. 鬼の畑・雪隠古墳
47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 亀石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡 52. 菖蒲池古墳 53. 五条野宮ヶ原1・2号墳 54. 五条野向イ古墳
55. 五条野城脇古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 梅山古墳 58. 五条野丸山古墳 59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 榎原遺跡 62. 田中廃寺
63. 和田廃寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡 69. 上の井手遺跡 70. 奥山リウゲ遺跡
71. 奥山久米寺跡 72. 雷丘東方遺跡 73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺跡 78. 飛鳥東垣内遺跡 79. 竹田遺跡
80. 小原宮ノウシロ遺跡 81. 八釣・東山古墳群 82. 東山マキド遺跡 83. 金鳥塚古墳 84. 飛鳥池工房遺跡 85. 船石遺跡 86. 飛鳥京跡
87. 飛鳥京跡苑池遺構 88. 甘樫丘東麓遺跡 89. 川原寺裏山遺跡 90. 川原寺跡 91. 橋寺跡 92. 東橋遺跡 93. 島庄遺跡 94. 石舞台1〜4号墳
95. 石舞台古墳 96. 馬場頭古墳群 97. 打上古墳 98. 都塚古墳 99. 戎成組田古墳 100. 坂田寺跡 101. 飛鳥稲淵宮殿跡 102. 塚本古墳
103. 朝風廃寺 104. 稲淵ムガンダ遺跡

第2図 飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1:25000)

〈飛鳥時代〉

飛鳥時代の7世紀に入ると、高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳や石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。さらに南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた東明神古墳、蔵骨器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西に並んで築かれており、南方には八角墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。

飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百濟大寺（吉備池廢寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。その他、斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿についても乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど、二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡や飛鳥宮ノ下遺跡で検出されている。この運河は上流に約1kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池工房遺跡が存在する。飛鳥池工房遺跡は7～8世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橋遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や吳原寺等の寺院が建立され、周辺の檜前大田遺跡では大壁状遺構や7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。

〈奈良時代以降〉

奈良時代以降の飛鳥地域の様相については西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、さらに藤原京から平城京に移るようになる。飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸杵の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白磁碗を使用した火葬墓や一辺約4mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁碗等が出土している。中世以降になると橘寺や川原寺、飛鳥寺など飛鳥の景観を形成していた堂塔伽藍が落雷等により相次いで焼失し、飛鳥の風景が大きく変貌していく。南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観音寺城が築かれるようになる。近世になると伊

勢や吉野などの寺社を往来する旅人の案内として分岐点に道標が設置される。西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町も賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。 (西光慎治)

第2節 カナヅカ古墳測量調査報告

1、はじめに

カナヅカ古墳は、明日香村大字平田に所在し、平田岩屋古墳・カナ塚・金塚古墳とも呼ばれる終末期古墳である。現在は宮内庁によって欽明天皇檜隈坂合陵陪冢に治定されている。この地域は飛鳥の西の玄関口に位置し、西から梅山古墳、カナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西一直線に並んで築かれている。梅山古墳の西側には古代の官道下ツ道が南北に走っており、途中紀路と合流する交通の要衝にあたる。

カナヅカ古墳については明治時代に岩屋山古墳と同様の大型切石横穴式石室が破壊されたとされており、詳細についてはよくわからなかった。1999年に至って、明治23年の破壊当時の様子を記した古文書（西内史料）が見つかり、カナヅカ古墳の様相が明らかとなってきている（亀田2000）。次にカナヅカ古墳の研究史について整理を行っていく。

2、研究史

カナヅカ古墳については1804（文化元）年、河村秀根の『書紀集解』の中に「高市郡平田村東北有_レ陵、俗呼曰_二梅山_一。其域有_二小冢_二。一曰_二経塚_一、一曰_二金塚_一。」と記されており、梅山古墳の陪冢と考えられていたことがわかる。

1829年、津川長道は『卯月日記』の中で「此所を過て田中に小高き所ありて金塚といふ。南に大なる石のあらはれたるより見れハ、陵墓の形ちなり。里人にとへ共只金塚いひ伝るはかりにて、たれかなる事ハしれず。」と記されており、石室材がこの頃にはすでに露出していたことがわかる。

1848年には北浦定政によって『打墨縄』が著されており、絵図には欽明天皇陵と鬼ノ俎・雪隠の間に「金塚」と記されており、その解説文には「欽明陵ノ東ニ双ヒテ金塚ト呼アリ式ニ吉備姫王ノ檜隈ノ墓ハ高市郡檜隈陵ノ域内ニアリト有ハ此金塚ナルベシ。則欽明陵ノ域内ナリ」と記されている。

1854年になると津久井清影の『聖蹟圖誌』「大和國高市郡檜隈及身狭越智並畝傍山四邊諸陵図」の中で欽明天皇陵と鬼ノ俎・雪隠の間に「岩屋」と記しているのがカナヅカ古墳である。ここには石室の入り口が表現されており、開口していたことがわかる。

更に3年後の1857年、谷森善臣の『大和國山陵廻之日記』の中に「此陵の東にある金塚とよぶ冢を吉備姫王の御墓ならむ云々」と記されている。

1867年、欽明天皇檜隈坂合陵の文久の修陵後の様子を描いた陵墓図（岡本桃里・奥書）があり、欽明天皇陵よりもさらに東側に小さな高まりが描かれており、そこに「字金塚檜隈坂合陵」と記されている。位置や小字が「金塚」と記されていることからカナヅカ古墳の墳丘を描いたものと考えられる。墳丘には草木が茂り、横から見た景観は現在の風景とよく似ている。

このように、江戸時代には早くも石室が開口しており、欽明天皇陵の陪冢とされ、被葬者についても吉備姫王の墓と考えられていたことがわかる。

明治時代以降では1890年に三宅米吉氏が偶然カナヅカ古墳の破壊に遭遇し、「此の塚内部の構造は例の方形なる玄室に、羨道つき、入口は南に向へるものなるが、其の石材は實に巨大なるものにて、中には長さ一丈許幅五尺もあるものあり。而して皆磨礪精工、必ず由ある陵墓と見えたり云云」と記されている（喜田1913）。

同年、西内成郷氏もカナヅカ古墳の破壊の差し止めと保存のため奈良県知事宛に「欽明天皇檜

隈坂合御陵ノ陪塚保存ノ義ニ付、」の上申書（西内史料）を提出している。これには破壊までの経緯と石室構造について詳細に記されている（西内1890）。

1892年には宮内省によって欽明天皇陵陪塚に治定されている。これは西内氏の上申書が保存に大きく働きかけたものと考えられる。

大正時代以降では1914年に刊行された『大和史料』に「皇極孝徳二帝ノ御母吉備姫王ノ墓ナリ、檜隈坂合陵欽明帝ノ域内ニアリテ金冢ト字ス。」と記されており、吉備姫王の墓として考えられていたことがわかる（齋藤1980）。

1924年には『高市郡古墳誌』の中で「長径4間、短径2間、高さ1間半の円墳で面積約23歩ある。此の塚はもと石槨露出してあて石材採取の為に破壊されたが、後修造せられてキヨ塚と共に現在は欽明天皇御陵陪塚となり松樹が密生して居る。周辺は畑地である。」とある（高市郡役所1923）。破壊時には石室が露出するまで削平を受け、現在の墳丘は修復された姿であったことが窺える。

昭和時代では『高市郡古墳誌』以降、長らくカナヅカ古墳についての認識が薄れていたが、1971年に「忘れられていた平田岩屋古墳」（森1971）の中で航空写真の検討から「方墳の残骸が考えられる畠地がある」と指摘されており、カナヅカ古墳が一辺約50mの方墳と推定され、再び注目されるようになった。

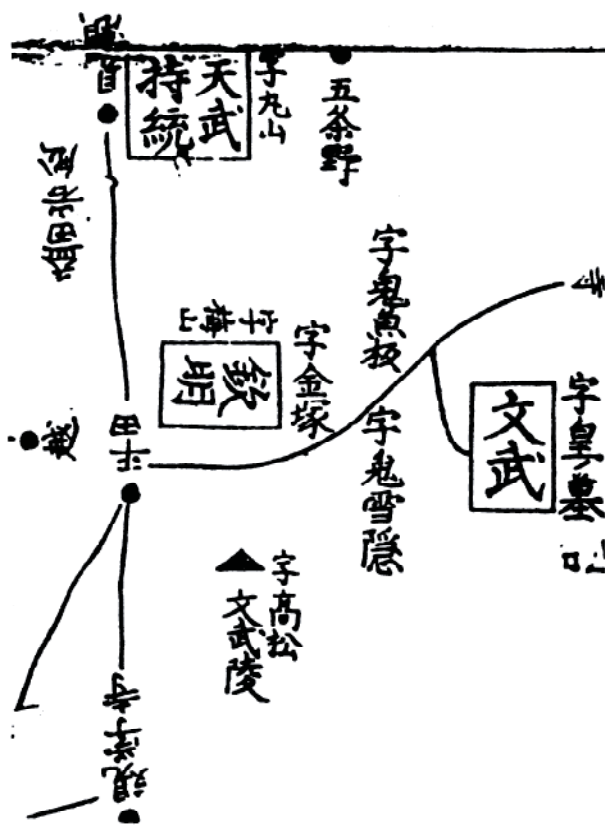
1974年には『明日香村史』が著され、平田岩屋古墳の項目で「欽明天皇陵古墳東方に、東・北・西方の三方が小高くなったコの字状の地形の中央部に、墳丘が存在したとみられる場所があり、奈良市帯解所在の黄金塚古墳と同様の立地環境が感じられる。」とあり、また「欽明天皇陵が二重濠であれば、此の古墳が濠外に築造されたことになり欽明天皇陵の陪塚の性格が強くなる。」と記されている（伊達1974）。

1985年には『飛鳥谷古墳集団の復元とその歴史的意義』の中でカナヅカ古墳の復元が行われ、一辺200唐尺（58.4m）の墳丘（方形壇）の外側に空濠状遺構（100唐尺）とさらに外側にコ形斜面整形痕（100唐尺）がある東西175.2mの古墳に復元している。石室については三宅氏の記録から巨大な切石を用いた横穴式石室とされ、構造等から7世紀第Ⅲ四半期頃の築造と考えられている（藤井1985）。

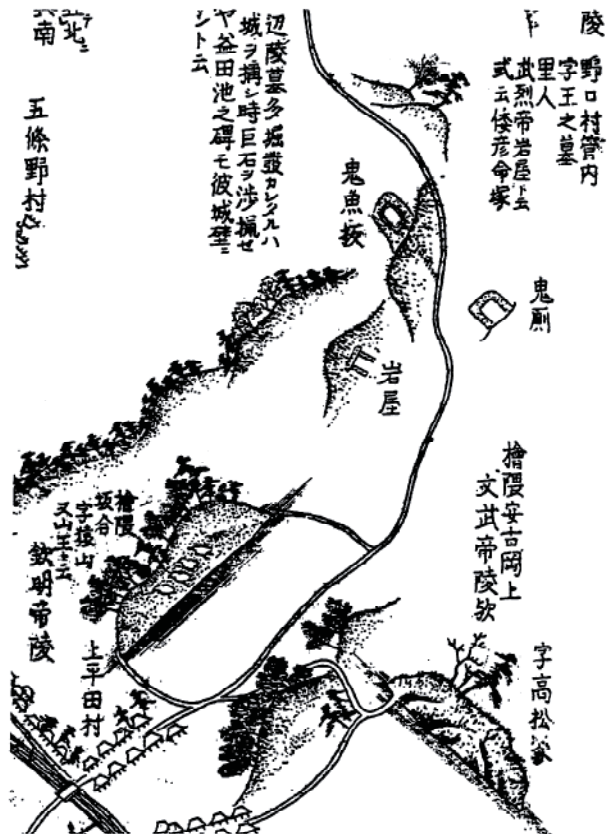
1996年からは明日香村教育委員会による範囲確認調査が行われており、**第1次調査**では幅11mの区画溝が検出されている（明日香村教委1997）。**第2次調査**（1997）では、治定地南側に隣接して土壙群が検出され、そこから破壊された石英閃緑岩が出土している。土壙群の位置関係等から玄室の破壊された痕跡であると考えられている（明日香村教委1998）。**第3次調査**（1998）でも第1次調査の東西溝の続きと盛土が検出され、現在に至っている（明日香村教委1999）。

平成に入ると1999年に「西内成郷と金塚」が著され明治23年の破壊当時の様子を記した古文書（西内史料）の存在が明らかとなり、カナヅカ古墳が岩屋山式横穴式石室である可能性が指摘された（亀田1999）。さらに西内史料について再度、検証された「欽明天皇檜隈坂合陵・陪塚 カナヅカ古墳の覚書」の中では、カナヅカ古墳が岩屋山古墳に後続する峯塚古墳と同形式の切石を用いた横穴式石室で、一辺約35mの二段築成の方墳の前面には幅約60mのテラスを有する7世紀中頃の終末期古墳であることが明らかとなった（西光2000）。

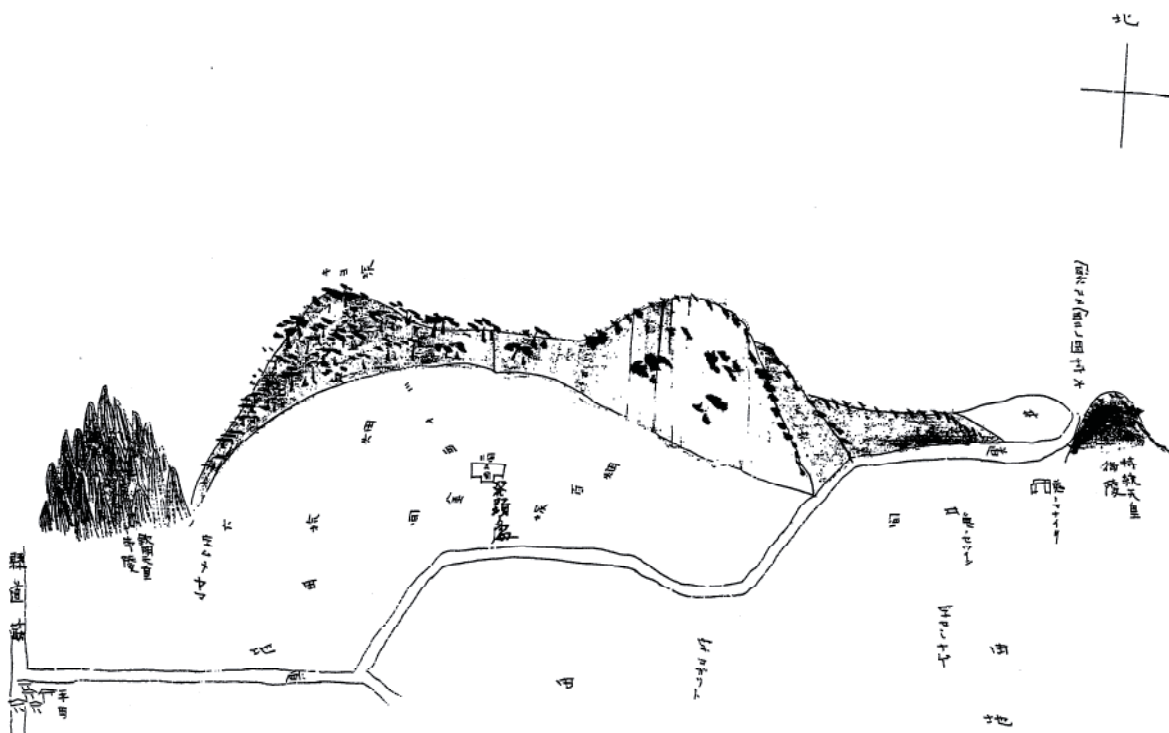
以上、簡単ではあるがカナヅカ古墳の研究史を振り返ってみた。カナヅカ古墳については江戸時代には欽明天皇陵の陪塚と考えられており、吉備姫王の伝承もあったことが伺える。また墳丘には巨大な石材が露出しており、石室も開口するなど早くから改変を受けていたことが窺える。



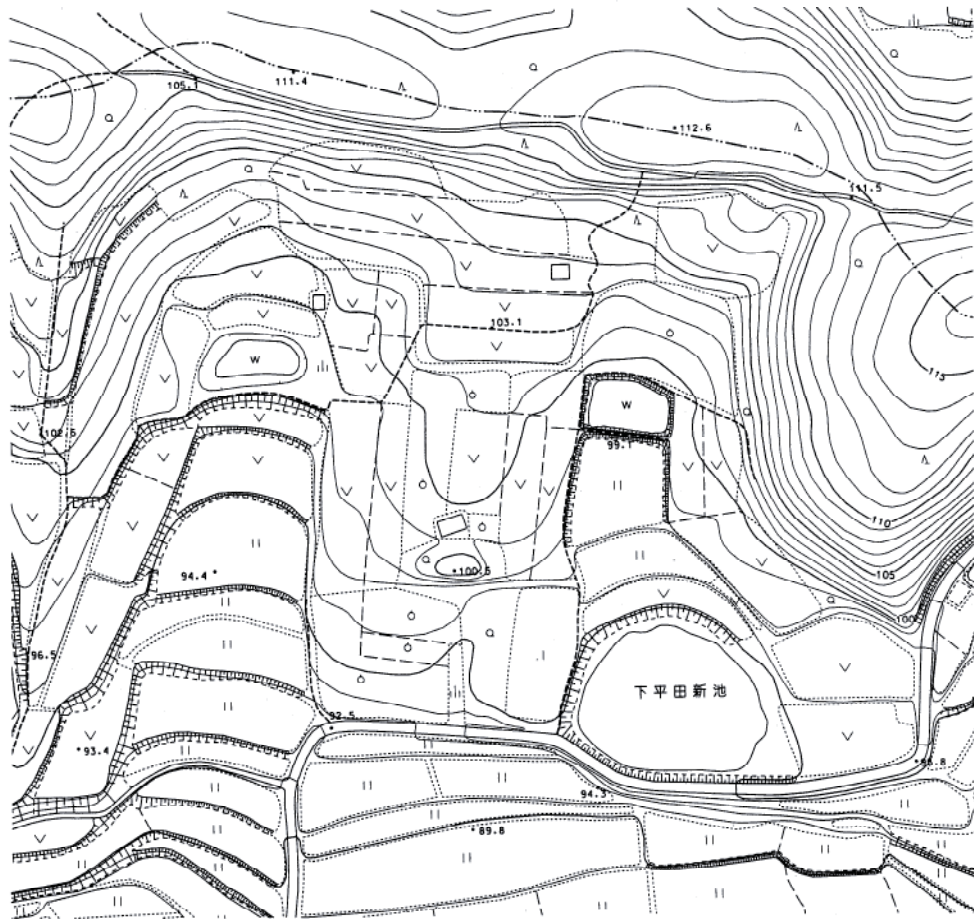
第3図 打墨縄 (1848)



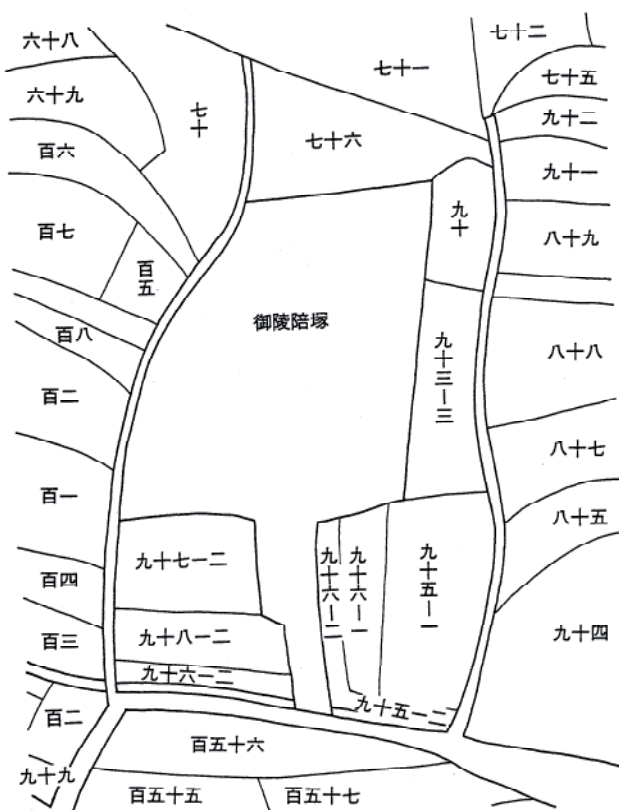
第4図 聖蹟図志 (1854)



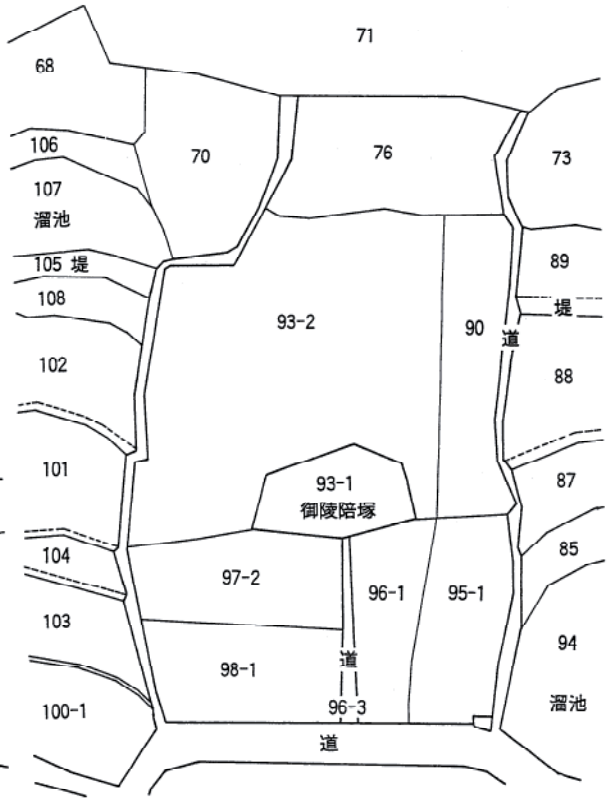
第5図 古物發掘第26號 (1890)
カナヅカ古墳位置図



第6図 カナヅカ古墳周辺地形図



第7図 大和國高市郡平田村地引切圖



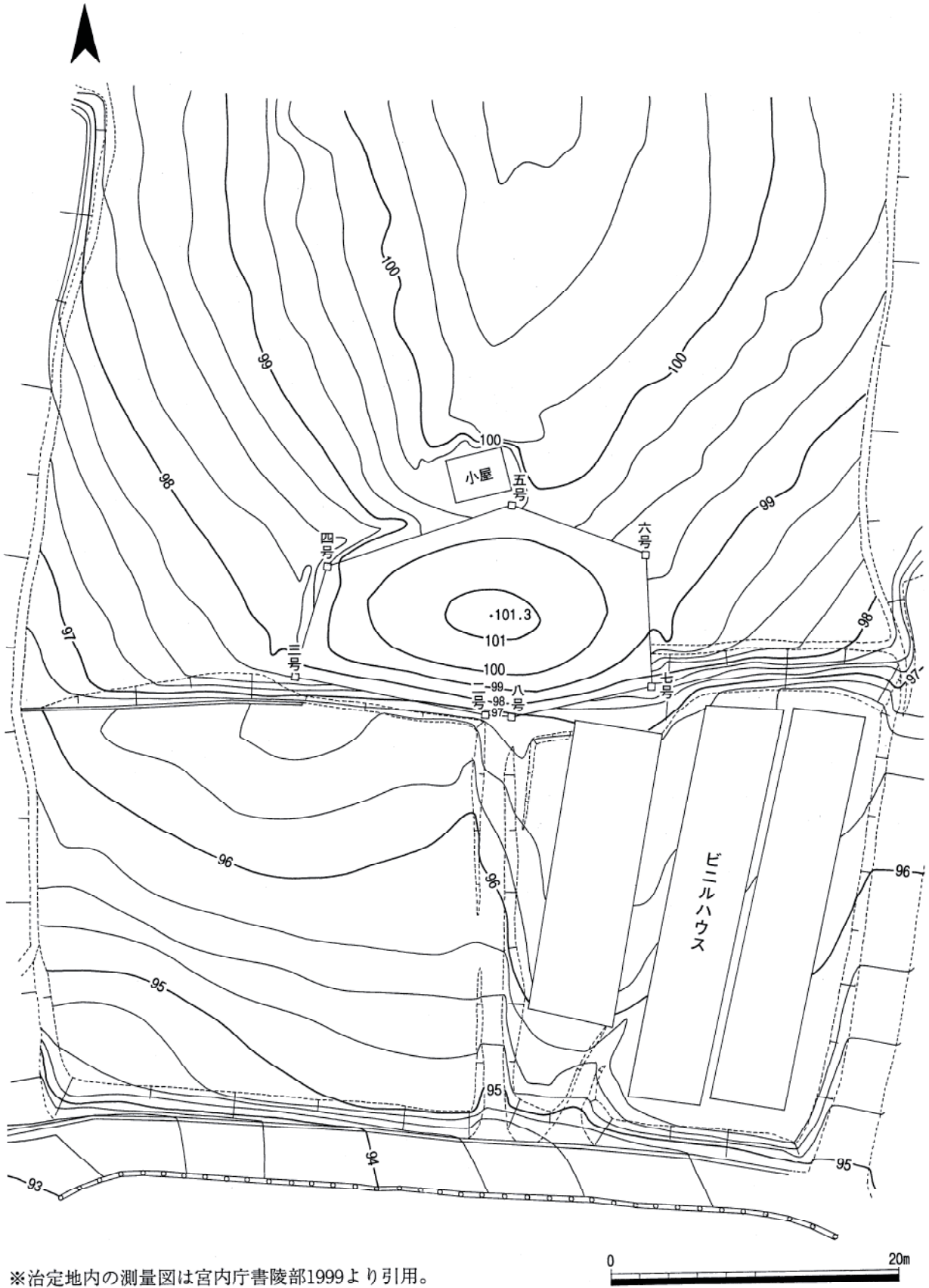
第8図 奈良県高市郡明日香村地籍図

3、測量調査報告

カナヅカ古墳は東西に伸びる丘陵の南斜面の一部を東西約150mにわたって「コ」字状に削り込み、その中央に築かれている。現在は宮内庁により、欽明天皇檜隈坂合陵陪冢ろ号に治定され、維持・管理されている。「コ」字状に削り込まれた区画の中央部分の27×15mの範囲が宮内庁の治定地であり、それ以外は民有地となっている。測量図をみると標高96.75～100.75 mの等高線が治定地に向かって緩やかにのびており、治定地内の頂部では標高101.3mを測る。治定地を境として墳丘の南側は1 m前後の段差を有している。墳丘規模については一辺約35mの二段築成の方墳と考えられており、墳丘南側に広がる平坦面に石室の基底面が設置されていることから、この平坦面は墳丘前のテラス面と考えられる。テラス面については現況で標高93.50～96.50m付近までの範囲で南に向かって傾斜しており、比高差は約3 mを測る。これは耕作に伴う削平の影響と考えられる。テラス面の規模は現況で東西60m、南北25mを測る（西光2000）。埋葬施設については全長約16mの切石を用いた横穴式石室で治定内に残存していることが西内史料から明らかとなっており、石室材と考えられる石英閃緑岩の一部が宮内庁五号杭付近で確認することができる（西光2000）。（辰巳俊輔）

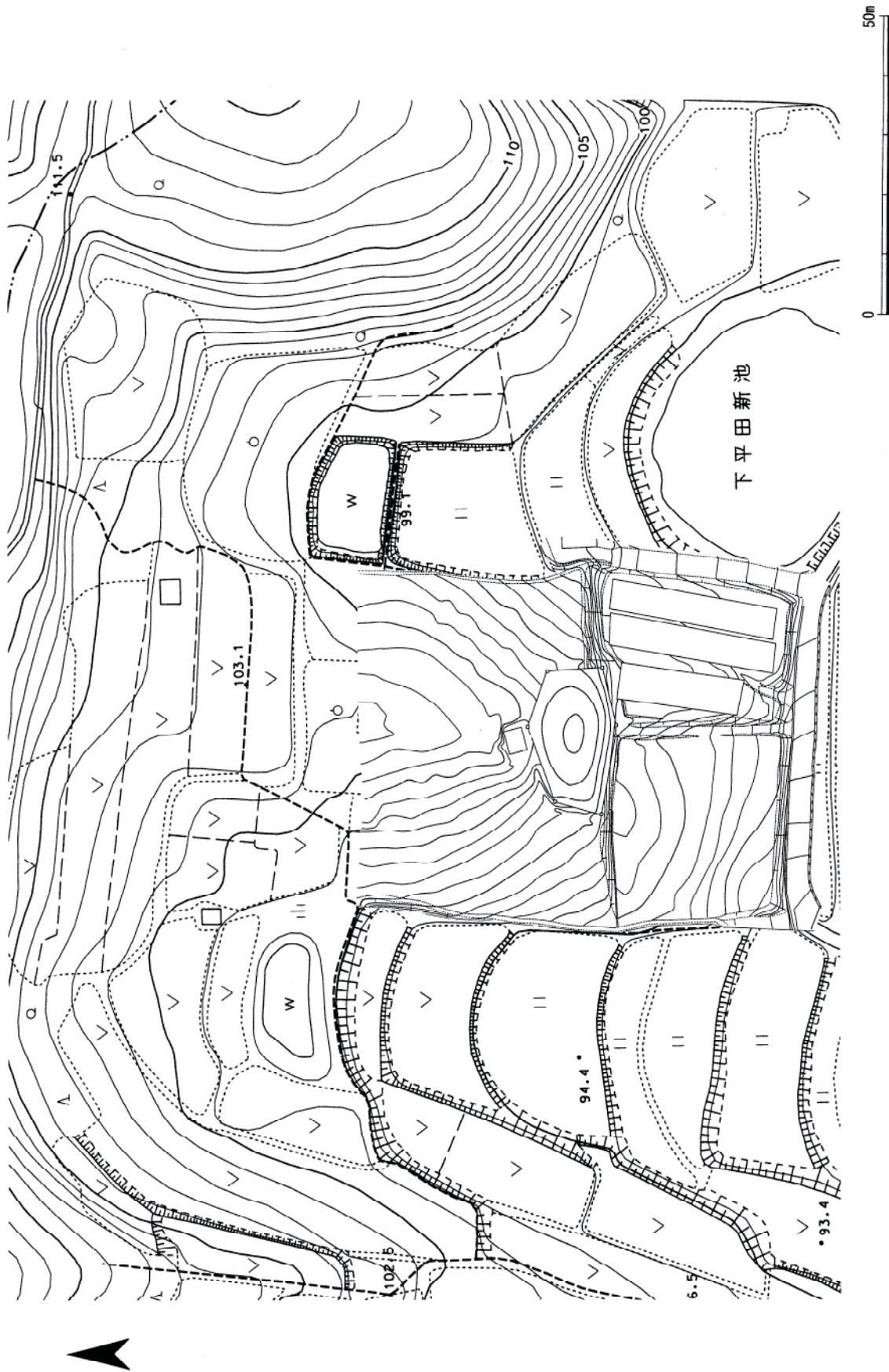
【引用・参考文献】

- 相原嘉之1996「カナヅカ古墳（第1次）範囲確認調査『明日香村遺跡調査概報 平成7年度』明日香村教育委員会
- 相原嘉之1996「カナヅカ古墳（第2次）範囲確認調査『明日香村遺跡調査概報 平成8年度』明日香村教育委員会
- 遠藤鎮雄1974『聖蹟図志』『史料 天皇陵－山陵志－前王朝陵記・山陵図絵－』新人物往来社
- 亀田 博1999「西内成郷と金塚」『季刊明日香風』73号 飛鳥保存財団
- 喜田貞吉1913「上古の陵墓」『皇陵』日本歴史地理学会
- 清岡廣了1998「カナヅカ古墳（第3次）範囲確認調査『明日香村遺跡調査概報 平成9年度』明日香村教育委員会
- 宮内庁書陵部1999「欽明天皇 檜隈坂合陵第2號」『陵墓地形図集成』学生社
- 西光慎治2000「飛鳥地域の地域史研究（1） 欽明天皇檜隈坂合陵・陪冢 カナヅカ古墳の覚書」『明日香村文化財調査研究紀要』創刊号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2002「飛鳥地域の地域史研究（2） 今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』第2号 明日香村教育委員会
- 齋藤美澄1890「高市郡 陵墓・檜隈墓」『大和志料』上巻 奈良県教育委員会『大和志料（下）』歴史図書社1970年復刻
- 白石太一郎1967「岩屋山式横穴式石室について」『ヒストリア』第49号 大阪歴史学会
- 高市郡役所1915『高市郡志料』
- 伊達宗泰1974「皇陵 平田岩屋古墳」『明日香村史』上巻 明日香村史刊行会
- 谷森善臣1857「藺笠のしずく」（『奈良県史3考古』名著出版1989年に所収）
- 津川長道1829「卯花日記」（『飛鳥京跡関係史料集（2）近世紀行文編所収』奈良県立橿原考古学研究所
- 西内成郷1890「欽明天皇檜隈坂合御陵ノ陪冢保存ノ義ニ付」関係資料綴り『古物發掘』第26號 狭山文庫古文書93
- 藤井利章1985「飛鳥谷古墳集団の復元とその歴史的意義」『末永先生米寿記念献呈論文集』 乾 末永先生米寿記念会
- 森 浩一1971「忘れられていた平田岩屋古墳」『青陵』17 奈良県立橿原考古学研究所



※治定地内の測量図は宮内庁書陵部1999より引用。

第9図 カナヅカ古墳墳丘測量図 (1:400)



第10図 カナヅカ古墳地形測量図 (1 : 1000)

第3節 真弓ミヅツ古墳踏査報告

1、はじめに

真弓ミヅツ古墳¹⁾は奈良県高市郡明日香村大字真弓小字ミヅツ133-1他に所在する終末期古墳である。古墳が所在する地域は古く「真弓岡・越智（小市）岡」と呼ばれ、周辺には磚積式横穴式石室墳のカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳、さらに横口式石槨墳のマルコ山古墳、東明神古墳など多くの後・終末期古墳が点在している。また、古墳の南東には延喜式内社である櫛玉命神社が鎮座している。真弓ミヅツ古墳はカヅマヤマ古墳、真弓テラノマエ古墳と同じ東西に伸びる低位丘陵の南側斜面に立地している。踏査は2008（平成20）年から2009（平成21）年にかけて休日を利用して行った。（辰巳俊輔）

2、踏査報告

真弓ミヅツ古墳は東西に伸びる低位丘陵の南側斜面を利用して築かれている。墳丘の背後には東西70m、高さ約12mにわたって終末期古墳の特徴である古墳造成時の切断面が明瞭に確認できる。切断面には数カ所の滑落崖が形成されている。また、近年、果樹園等の開墾により、進入路などが設置され、古墳造成時の切断面が改変されている。現状では墳丘の高まり等は確認出来ないが、真弓テラノマエ古墳も墳丘が開墾等で削平されていたことから真弓ミヅツ古墳も削平などの改変をうけているものとする。周辺には漆喰の付着した結晶片岩が散乱していることから、カヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳と同様の結晶片岩を使用した磚積式横穴式石室墳であった可能性が考えられる。（辰巳俊輔）

3、表採遺物

古墳が存在していたと考えられる範囲から漆喰の付着した結晶片岩の破片を表採している。いずれの石材も細片となっており、もとの形状は不明なものカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳と同様の板状を呈した石材であったと考えられる。（辰巳俊輔）

【註】

- 1) 真弓ミヅツ古墳については遺跡地図には掲載されていないことから、ここでは大字と小字名から真弓ミヅツ古墳と仮称することとする。

【引用・参考文献】

飛鳥資料館編1981『飛鳥時代の古墳』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録

明日香村教育委員会2007『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第5集

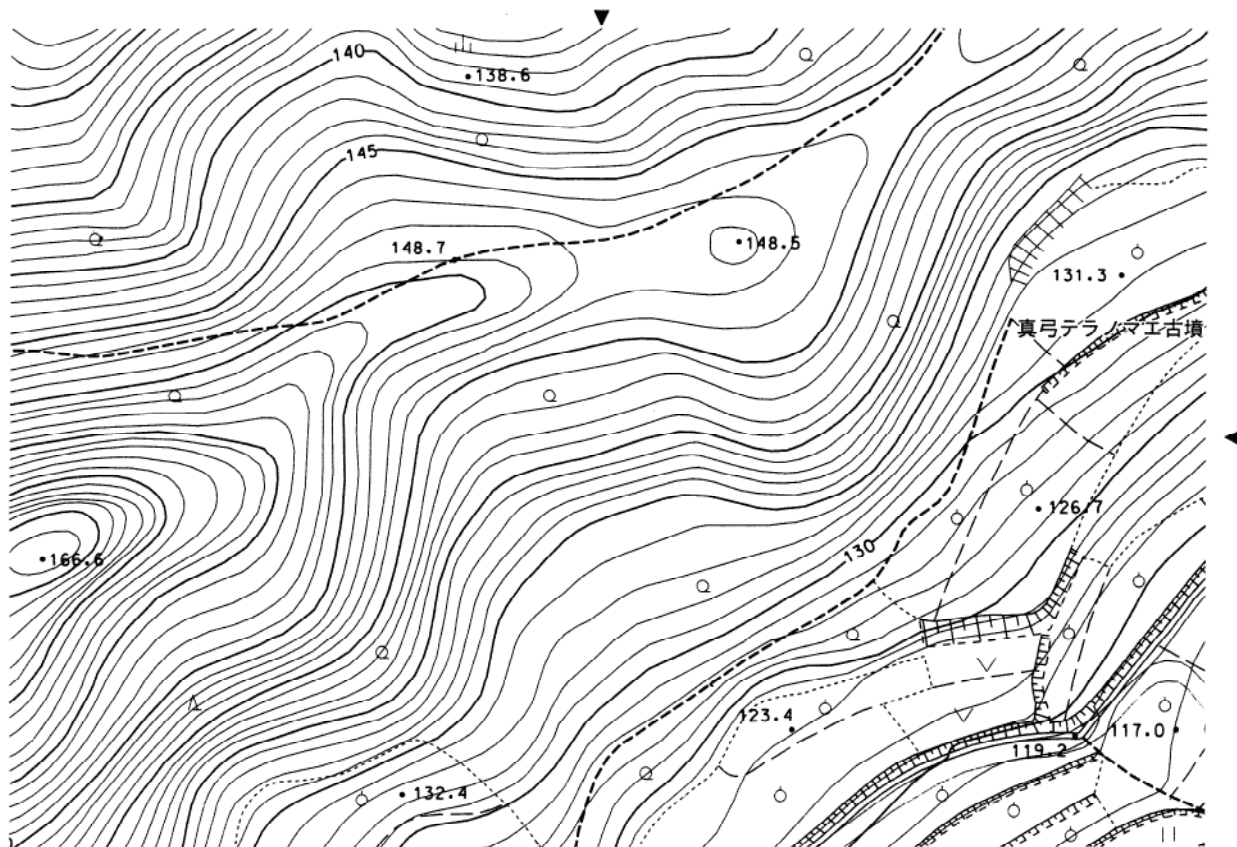
明日香村教育委員会2010『真弓鐘子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第7集

明日香村教育委員会2011『真弓テラノマエ古墳の調査』『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』

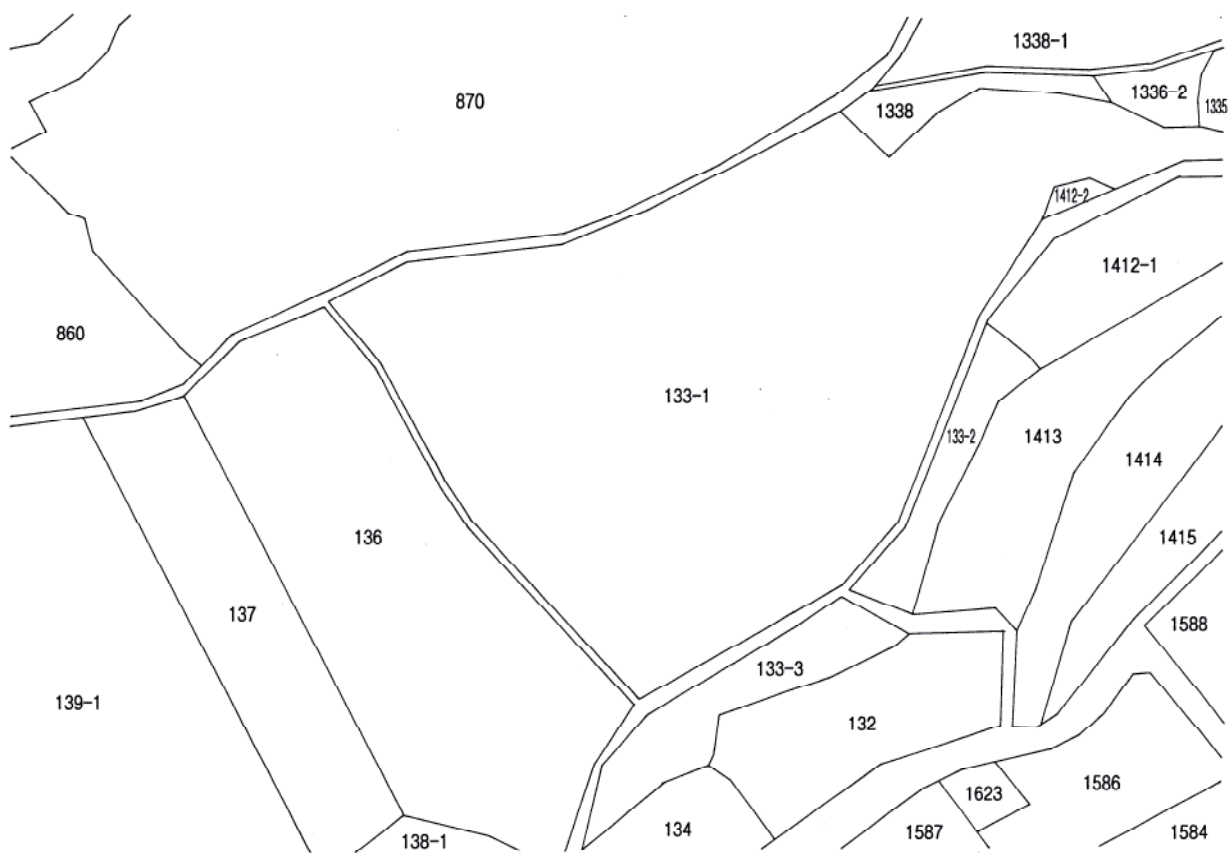
西光慎治2004『結晶片岩使用古墳研究序説』『明日香村文化財調査研究紀要』第4号 明日香村教育委員会

西光慎治2009『真弓テラノマエ古墳踏査報告』『明日香村文化財調査研究紀要』第8号 明日香村教育委員会

西光慎治編2012『真弓テラノマエ古墳の研究』『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会



第11図 真弓ミツツ古墳位置図 (1 : 1000)



第12図 真弓ミツツ古墳周辺地籍図 (1 : 1000)

第3章 総括

今回はカナヅカ古墳の墳丘測量調査と真弓ミヅツ古墳の踏査を報告することができた。カナヅカ古墳については治定地周辺が過去に明日香村教育委員会によって発掘調査が実施されており、その調査成果はカナヅカ古墳を考える上で重要なデータとなっている。また、飛鳥地域には梅山古墳をはじめ、野口王墓古墳など陵墓として維持・管理されている古墳が少なくない。今回、古墳築造時の切断面は諸般の事情により測量することはかなわなかったが終末期古墳の立地などを知る上でも重要であり今後、周辺部を含めた広範囲な測量調査を実施する予定である。また、真弓ミヅツ古墳については墳丘の高まりこそ確認はできないが、古墳築造時の切断面や結晶片岩の散乱状況などから、磚積式横穴式石室墳が存在していた可能性は高いと考えている。

このように、飛鳥地域には現在知られている後・終末期古墳だけではなく、古墳状隆起も含め、さらに増加することが予想されることから、今後も継続して踏査や測量調査を行い、飛鳥地域の後・終末期古墳を考える上での基礎資料の充実を図っていきたいと考えている。

(西光慎治)

報告書抄録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう						
書名	王陵の地域史研究						
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅶ						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編者名	西光慎治編						
著者名	西光慎治、辰巳俊輔						
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課						
所在地	〒634-0141 奈良県高市郡明日香村大字川原91-3 TEL 0744-54-5600 FAX 0744-54-5602						
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月25日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
カナヅカ古墳	奈良県高市郡明日香村 大字平田93-1他	29402	17A151	34度 28分 6秒	135度 48分 13秒	平成24(2012)年5月～ 平成25(2013)1月	学術
真弓ミツツ古墳	奈良県高市郡明日香村 大字真弓133-1他	29402	-	34度 27分 42秒	135度 47分 27秒	平成20(2008)年5月～ 平成21(2009)1月	学術
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
カナヅカ古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	-		一辺約35mの二段築成の方墳	
真弓ミツツ古墳	古墳	飛鳥時代	墳丘背後の切断面	結晶片岩		-	